マタイ 7:7-12「求めなさい」

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。あなたがたのだれが、パンを欲しがる自分の子供に、石を与えるだろうか。魚を欲しがるのに、蛇を与えるだろうか。このように、あなたがたは悪い者ではありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして、あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない。だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である」

わたくしは長男として生まれました。わたしの父親と母親は、わたしが何か言う前から、わたしに必要なものは何でも与えてくれました。そのようなわけで、わたしは「あれが欲しい」「これが欲しい」「ああしてくれ」「こうしてくれ」という要求をほとんどしないまま育ってしまいました。それが良いことか、悪いことか、わたしにはわかりません。いまでもわたしは人に対して「あれをくれ」「これをくれ」と言うことがあんまりありません。言う必要を感じないのです。

これに対して、二番目に生まれた人というのは、そういうわけにいきません。上がつっかえております。おちおちしておりますと、上にいるやつが、おやつでもおかずでも、あっと言う間に持って行ってしまいます。そのためどれだけくやしい思いをしなければならないことか。そういうわけで、何も要求しないで生きる、というわけにはいきません。「あれをくれ」「これをくれ」「これはわたしのだ」「あれはわたしのだ」「なんでわたしのを食べたのだ」「なんで私のところに座るのだ」「わたしの分はどこにあるのだ」という要求を強く出して行きませんと、下手したら、あの目の上のたんこぶのやつに全部持っていかれてしまいます。

これが三番目の人となりますと、もう何をか言わんやであります。

さてわたしたちは、自分というものを、また、この世界というものを、世界観という色の入った眼鏡でもって見ているのであります。だれひとりとして、まったく先入観なく世界を見ているという人はおりません。そうして、どういう世界観で世界を見ているか、ということに応じて、その見ている本人の生きかた、ふるまい方、というものが変わってまいります。

最初に申しましたように、長男は、のほほんという色眼鏡をかけて、この世界を見ております。自分が何も言わなくたって、愛情深いひとたちがすべてのものを全部あらかじめ備えていてくれるんだ。だから何にも考えなくたって与えられるんだ。そういう眼鏡でもって世界を見ておりますと、いったい日がな一日「あれちょうだい」「これちょうだい」ということは言わなくてすむのです。言おうという気持ちが起きないのです。

これに対して二番目に生まれた人というのは、上がつっかえているという、たんこぶつきの眼鏡をかけて、この世界を見ております。自分が何か言わないと、あのずるい上の者が全部持って行ってしまう。大事に自分にとっておいたものだって、いつのまにか持って行かれてしまう。こういう眼鏡でもって世界を見ておりますから、「これはわたしの」「あれはわたしの」「どれもわたしの」ということを、いつでも言わなければ気がすまなくなります。

今日の聖書の箇所で、イエス様は「大胆に求めよ」「ねばり強く求めよ」「あきらめずに求めよ」ということを教えさとしていらっしゃいます。さとす、と言うよりは、励ましておられる、と言ったほうがいいでしょう。

イエス様が「大胆に求めよ」と励ましてらっしゃるのは、このわたしたちが、求めることにおいて、ずいぶん萎縮しているからであります。もちろん、まったく何も求めないと言うわけぢゃあない。多少求めるところはあるんです。ですけれどもわたしたちは、求めるそばからもう「どうせ与えられないんだろう」という気持ち七割でいるのです。そんなに気持ちが縮んでいるのは、わたしたちが色眼鏡をつけて世界を見ているからでありまして、それは、「いっしょうけんめい求めたけれど、与えられなくて、がっかりしている人だらけの世界」というふうに、世界を見ているからであります。不思議なもので、そういうふうに見ようとすれば、この世界は確かに、がっかりな世界に見えてまいります。がっかりな世界を見ておりますと、確かに自分もまた、がっかりだ、というふうになってまいります。

イエス様が「ねばり強く求めよ」と励ましてらっしゃるのは、このわたしたちが、求めることにおいて非常に気が短いからであります。もちろん、はなから祈ろうとしないわけぢゃあない。少しは祈るんです。けれども、わたしたちは祈り始めて５分たっても気分が良くならなければ、「ああ、もうだめなんだな」という気持ち七割になるのです。マルチン・ルターという宗教改革者は、人間が生きることを「りんごの苗を植えること」だと申しました。これは、りんご

の苗を植えてから実がなるまでには多くの年月を待たなければならないよ、という意味です。ところがわたしたちというのは、りんごの苗を植えて水をやって５分たっても実がならないからといって、頭にきて、植えたそばから苗を引っこ抜いてしまう人間ではないでしょうか。この「５分たつと真っ暗になる眼鏡」という色眼鏡をかけて世界を見ようとするならば、この世界は、ひっこぬかれたりんごの苗の残骸でいっぱいにうまった世界であります。そういう残骸だらけの世界を見ておりますと、確かに自分をも他人をも引っこ抜いた苗としていくのであります。

イエス様が「あきらめずに求めよ」と励ましてらっしゃるのは、なんにつけわたしたちは、あきらめがよいからです。そんなわたしたちだって、さすがに一回は試してみるものです。もし一度だって試さないのだとしたなら、そんなことは神様から怒られてしまいます。主人から財産を分け与えられたあの召使いは、主人が長い旅行に行っている留守中に、あずかった財産を壷にしまって土に埋めて隠しておきました。主人が旅行から帰って来ますと、召使いは大目玉をくらいます。何がいけないと言うと、もらった財産を元手に商売してみることを一度だって試そうとしなかったからです。そんな意気地の無い心根がいけないといって大目玉をくらった、というお話をイエスさまがなすっておいでです。そういうわけだから、わたしたちはなんにつけ最低一度は試してみなきゃいけない。でも、すこぶるあきらめがいいんです。一回やってだめだったら、もうあきらめてしまう。二度やって失敗するのが怖いのです。この「二度目は無い、まして三度目など無い」という色眼鏡をつけて世界を見るならば、この世界においてはなんにつけ、あきらめのよいことが、立派なこと、正しいこと、となるのが道理です。仏教ではもともと真理のことを指すのに「諦」という、ゴンベンにミカドという字を書いた漢字を使っておりました。それがいつのころからか、この「諦」という字を「あきらめる」と読むようになったのです。それはつまり、一度やってだめだったら、すっぱりあきらめておしまいなさい。それがこのはかない世界における正しい生き方、かっこういい生き方ですよ、ということであります。

そんなわたしたちですから、イエス様は「大胆に求めよ」「ねばり強く求めよ」「あきらめずに求めよ」ということを是非ともおっしゃらなければならなかった。そのことはまた、わたしたちがこれまでずっとこの世界を見て来た「色眼鏡」をすっかりはずして、イエス様が世界を見てらっしゃるとおりにわたしたちも見なければならん、ということを意味しております。イエスが世界を見ていたもうその目でわたしも世界を見る。これがキリスト者であります。

英国国教会の最高指導者でありますカンタベリー大司教ローワン・ウイリアムズ師は、ＷＣＣ（世界教会協議会）の第６回総会におきまして、キリスト者が何であるかということにつき、このように申しました。
「イエスが、わたしたちの生き方を根底から規定している。そのような者であることが、キリスト者の何たるかということですよ」
「キリスト教とは何かといいますと、それは『自分は絶対的真理を知っている』と主張することではありません。むしろ『自分は世界をこう見ていますよ』という世界観にこそあるのです」
「キリスト教の世界観は、わたしたちの心の奥底にある傷や恐れをまったく変えてしまうものです。まさにそれゆえにキリスト教の世界観は、世界の最も重要な次元をまったく変えてしまうことが出来るのです。」
「キリスト教の世界観とは、イエスが立っておられる場所にわたしたちが立って、イエスの権威のもとで、イエスに命の息を吹き込まれつつ、イエスの目でわたしたちがこの世界を見ることにほかなりません」

わたしたちがイエスという新しい眼鏡をつけるのであります。そうしますと、世界はもう昨日の世界ではない。同じ世界ではあるんだけれども、見え方が違ってまいります。

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。あなたがたのだれが、パンを欲しがる自分の子供に、石を与えるだろうか。魚を欲しがるのに、蛇を与えるだろうか。このように、あなたがたは悪い者ではありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして、あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない。だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である」(マタイ 7:7-12)

第一に「大胆に求めなさい」と言われております。これは、相手があることだからであります。相手というのは、わたしたちの父なる神様であります。慈愛に富んだ天の御父が、わたしたちの父であって、このお方がわたしたちの向き合っている相手だということです。わたしたちは何か空中に向かって空しい言葉をつぶやいているのではない。この天の御父の広い広いみふところにあって、この大きな慈愛の御父のやさしいおんまなざしに向かって、子どもとしてわたしたちが求めているのだ。そういう眼鏡でもって世界を見てごらんなさい、と

いうことです。そうしたら気付くことがある。泥棒をしている父親だって、自分の赤ん坊がミルクを求めているのに毒をやったり、おもちゃを求めているのに爆弾をやったりするわけじゃない。悪い父親だって、自分の子には良い物を与えてやりたいと思っている。それが父親というものだ。ましてわたしたちは、空中に向かって空しい言葉をつぶやいているのではない。天の御父に向かって子として願い求めているのだ。それがわたしたちで、イエス様はそういうふうに世界を見ておられた。わたしたちも同じ目で見て、祈るべきであります。

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる」（マタイ 7:7-8）

第二に「ねばりづよく探しなさい」と言われております。いにしえの聖徒たちがみんな気の短い人ばかりであって、祈って５分たって結果が出ないから、もうやめた、というのであったら、聖書の１ページだって書かれることはなかったぢゃないでしょうか。ノアが箱舟を一から組み立てるという作業を５分で放り出していたら、どうなっていましたか。あれが完成するのに１２０年かかったと聖書は言ってます。モーセが紅海を目の前にして５分間祈って二つに割れないもんだから、きびすをかえしてエジプトに戻っていたら、聖書は創世記だけでおしまいで、残りの６５巻は永久に書かれることはなかったんぢゃないでしょうか。イエス様は荒野で４０日４０夜断食して祈られましたが、祈り始めて５分でいやになってお菓子を食べ始めていたら、悪魔と直接対決して勝利するところまで行かなかったのぢゃないですか。信仰の英雄たちはみんな、ねばりづよく探し求め、ねばりづよく祈り求めて、求めていたものを手に入れました。ノアは家族の命を得ました。モーセは民の命を得ました。イエスは人類の命を得ました。５分で投げ出していたら、家族は失われ、民は失われ、人類は失われていたでしょう。そういうわけですから、ねばりづよく祈った人たちの祈りでもって、この世界が成り立っていると言ったって、けっして言い過ぎではありません。そういう眼鏡で世界を見るとしたなら、この世界は、祈りによって出来上がった世界です。わたしたちはねばりづよく祈って５分過ごすべきです。ねばりづよく祈って１０分過ごすべきです。１０分したら、もう投げ出していいのだろうか。いや。わたしたちは１時間、１日、１週間、１か月、１年と、ねばりづよく祈らなければなりません。

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す

者は見つけ、門をたたく者には開かれる」（マタイ 7:7-8）

第三に「あきらめずに叩き続けなさい」と言われております。ああ、わたしの目の前で天の扉が閉じられている。ぴっちり閉じられている。だから、ドンドンドンと、一度叩いてみる。だが反応が無い。開かれない。ぴくりともしない。ぢゃあ、あきらめてしまおう。そうであったらいけないということです。一度叩いてみて開かれないから、二度目に叩いてみる。二度叩いて開かれないから、三度目に叩いてみる。三度叩いても駄目だから、もうやめる。そうではない。四度でも五度でも、あきらめずに叩き続ける、ということです。

そのように叩き続けるということについて、それがむくわれる根拠が何かあるんだろうか？　そのように叩き続けるということに対して、天の扉が必ず開かれるという保証が何かあるんだろうか？

わたしたちにとっての唯一の根拠、わたしたちにとっての唯一の保証は、主イエスキリストご自身であります。実に主イエスキリストは、十字架という絶望の淵にお降りになって、そこからよみがえられた、勝利者にてまします。イエスは勝利者であります。

このイエスキリストの復活の事実において、あのすべての萎縮させるもの、あのすべてのがっかりさせるもの、あのすべての断念させるもの、あのすべての逃げ出させるもの、あのすべてのあきらめさせるものが、まったく打ち破られたのです。イエスの十字架の死に直面して、弟子たちは確かにひとたびは、身を縮ませ、心を縮ませ、小さくなり、がっかりし、断念し、逃げ出し、一切すべてあきらめて、あきらめきって、部屋に閉じこもっておりました。そこへ、復活の主イエスがすーっと入って来られて、「平安あれ！　わたしは死に打ち勝った」とおっしゃられたのです。イエスは勝利者であります。

ヨハネによる福音書にこのように記されております。
「その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは主を見て喜んだ。イエスは重ねて言われた。『あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす』」（ヨハネ 20:19-21）

このイエスキリストの復活の事実において、あのすべての萎縮させるもの、あのすべてのがっかりさせるもの、あのすべての断念させるもの、あのすべての逃げ出させるもの、あのすべてのあきらめさせるものが、まったく打ち破られたのです。イエスは勝利者であられる。イエスが勝利者であられる。イエスが死と陰府に勝利されたという事実。この事実が、わたしたちの祈り求めることの根拠、わたしたちが探し求めることの根拠、わたしたちが叩き続けることの根拠であります。それ以外の根拠のあろうはずもありません。

ヨハネの黙示録において、主イエスご自身こう宣言なさっておられます。
「恐れるな。わたしは最初の者にして最後の者、また生きている者である。一度は死んだが、見よ、世々限りなく生きて、死と陰府の鍵を持っている」（黙示録 1:17-18）
さらにこのように言われております。
「『聖なる方、真実な方、ダビデの鍵を持つ方、この方が開けると、だれも閉じることなく、閉じると、だれも開けることがない』　その方が次のように言われる。『わたしはあなたの行いを知っている。見よ、わたしはあなたの前に門を開いておいた。だれもこれを閉めることはできない。あなたは力が弱かったが、わたしの言葉を守り、わたしの名を知らないと言わなかった』」（黙示録 3:7-8）

勝利者イエスが、勝利者として、死と陰府の鍵を持って、生きていたもう。いま生きていたもう。勝利者として生きていたもう。このイエスが閉じると、だれも開くことができない。このイエスが開くと、だれも閉じることができない。この、天の扉を閉じまた開く権能を執りたもうイエス。勝利者でありたもうイエスが、わたしたちにこのように言われる。「わたしの名によって願うことは、何でもかなえてあげよう。こうして、父は子によって栄光をお受けになる。わたしの名によって何かを願うならば、わたしがかなえてあげよう」（ヨハネ 14:13-14）

勝利者イエスの眼鏡をかけてこの世界を見るならば、この世界は、復活の歌がなり響いている世界。勝利の歌がなり響いている世界であります。あの墓石のふたが吹き飛ばされて影もかたちもない世界。光り輝く復活の主イエスが「恐れるな！」と叫んで御手の傷を高く示していたもう世界。死の背骨がへし折られ、陰府の歯がすべて抜き取られた世界であります。あの天の高き永遠の扉に、主イエスご自身が手をかけて、こう言われる世界です。「わたしがあなたの前に門を開いておいた」

イエスは勝利者である。勝利者イエスが言われる、「わたしがあなたの前に門を開いておいた」

それゆえに、わたしたちは祈るのだし、また、祈ることができるのです。それは、わたしたちの祈りの根拠が、わたしたち自身にはなく、わたしたちの信仰にもなく、わたしたちの祈りにすらなく、ただ、わたしたちの祈りの根拠が唯一この勝利者イエスにあるからです。イエスは勝利者でありたもう。ゆえに、わたしたちは祈るのだし、祈ることができるし、祈るべきであります。

イエスは勝利者である。ゆえに、わたしは祈る。大胆に祈る。ねばり強く祈る。あきらめずに祈るのです。

お祈りいたしましょう。

祈り

天の父なる神様。どうかわたしたちに、世界を見る新しい目をお授けくださいますように。わたしたちは、あの萎縮させるもの、あのがっかりさせるもの、あの断念させるもの、あの逃げ出させるもの、あのあきらめさせるもののゆえに、目に色をつけられて、祈ることができないようにされております。
しかし、主イエスは勝利者でいましたもう。この事実を感謝いたします。わたしたちはいま告白いたします。イエスは勝利者であり、イエスが勝利者であります。このイエスの復活の事実において、死と陰府の力がすでに打ち破られております。死と陰府の影でありますところの絶望の力がすでに打ち破られております。実に主イエスキリストご自身が、わたしたちの祈りの根拠であります。主が勝利者でいましたもうゆえに、わたしたちは祈れるのだし、祈ることが出来るようにされております。
どうかわたしたちが、イエスが見たもう同じ目でもっておのれを見、世界を見ることができますように。そのようにして、大胆に祈り、ねばりづよく祈り、あきらめずに祈ることができますように。こうして、わたしたちが変えられ、世界が変えられるさまを、見させていただくことができますように。
わたしたちは祈ります。わたしたちの祈りのゆえでなく、わたしたちの信仰のゆえでなく、わたしたちの力によってでなく、ただイエスが勝利者でありたもうというこの大いなる驚くべき事実のゆえに、ただイエスご自身を根拠に、わたしたちは祈ります。主イエスキリストの御名によって、アーメン